

御霊によって深みに

(1コリント2・10)

主の年二〇二〇年初めの主日礼拝です。新年礼拝では今年の年間聖句から、また今年の教会標語を説教題として語らせていただきます。

一、御霊の働きによって

時々、こういう体験談を聞くことがあります。「聖霊の満たしを体験したことによって、それ以来聖書を読むと良く分かるようになった」と。それは理に適っていると思われれます。なぜなら、聖書の言葉は、聖書の証言によれば、聖霊に動かされた人たちが神から受けて語ったものだからです(↓IIペテロ1・20〜21)。聖霊の満たしを受けますと、聖書記者を揺り動かした同じ霊の働きによって、聖書の言葉がぐつと身近に感じられるようになります。

聖句を見てまいります。(1コリント2・10)それを、神は私たちに御霊によって啓示してくださいました。御霊はすべてのごことを、神の深みさえも探られるからです。とあります。『新改訳2017』は、冒頭に〈それを〉という言葉が出てまいります。何を指して、〈それを〉なのでしょう。前の節に書かれている言葉です。〈目が見たことのないもの、耳が

聞いたことのないもの、人の心に思い浮かんだことがないもの〉です。

「十字架につけられたキリスト」は、人の心に思い浮かんだことがないものであつて、それは人間の知恵によれば愚かしいことです。ですが、御霊は、すなわち聖霊は、キリストが十字架につけられることによって、救いをもたらされたと明らかにしていると、語っているわけです。

二、御霊によらなければ

イエス・キリストを信じて洗礼を受け、教会員になられた方は、十字架につけられ、むごたらしい死に方をされ、死者の中からよみがえらされたイエス・キリストを、救い主として信じています。ごく自然に信じられているとしたら、その人が御霊の働き、すなわち聖霊の働きにあずかっているからです。と言いますのは、生まれながらの人間は、イエス・キリストがあなたのために十字架でむごたらしい死を遂げてくださったと聞いても、まったく分からないからです。せいぜい「キリスト教会はどのように信じているのだな」と受け止めるだけでありましょう。ところが、御霊、すなわち御霊なる神の働きにあずかりますと、それまで愚かに見えていた教えが愚かではなくなり、聖書の言葉が他人事(ひとこと)でなくなり、神の知恵として見えてまいります。

すなわち、神と神に関することは、御霊の働きによらなければ分からないのです。ならば、どうしたら生まれながらの人がイエス・キリストによる救いを知ることができるのでしょうか。それは、上からの働きにより、人の知恵や努力による説得はむずかしいです。ゆえに、私共は祈ります。「〇〇さんが、イエス・キリストの救いを知ることができるように」と。さらには、御霊に導かれることをたいせつにします。パウロは語っています。2章4節です。(そして、私のことばと私の宣教は、説得力のある知恵のことばによるものではなく、御霊と御力の現れによるものでした。)<御霊にゆだねますと、すなわち御霊なる神にゆだねますと、その時々によさわしい知恵の言葉が与えられます。場合によっては、何の変哲もない自分から出た言葉を、神が用いられることでもあります。それは、神の御前でだれをも誇らせないためなのです。1章29節で語られています。〈肉なる者がだれも神の御前で誇ることがないようにするためです。〉と。

三、御霊によって深みに

今年、主にあつて、私が提案したいのは、御霊によって神の深みに導かれることです。御霊とは、単に神の霊ではありません。神は御自身を、父・子・聖霊としてあらわしておられます。御霊と

は、聖霊なる神です。次のように考えてみられてください。二千年前に、神は御子イエス・キリストを遣わし、人の姿で生まれさせてくださいました。続いて、神は紀元30年のペンテコステの日に聖霊なる神を遣わしてくださいました。すなわち、聖霊が下されました。聖霊なる神は霊ですから、世界のどこにでも同時的におられます。また、イエス・キリストの救いを信じた者の人格に住んでくださいます。ならば、聖霊なる神の働きを認め、大いに歓迎しようではありませんか。もし私たちが聖霊の働きを歓迎しないなら、どうなるでしょうか。神は紳士なご性質を持たれたお方ですから、無理に何かをなさることはありません。ですが、残念な結果になります。「助け主としてあなたのそばにいます。あなたの中に住みます」とおっしゃっているのに、受け入れないことになるからです。ヨハネの福音書1章11節に書かれているように、〈この方はご自分のところに來られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった。〉となつてしまいます。そうならないために、聖霊なる神を歓迎しようではありませんか。そして、目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、人の心に思い浮かんだことがないものを啓示してくださる神に、すなわち明らかにしてくださる神に、期待しようではありませんか。